

【セッション I】

「ラス・ヴェガスと世界の果て」

マイケル・ピーターソン（ウィスコンシン大学マディソン校准教授）

映画やコミックなどの大衆文化と、米国のテロ対策担当者は、ラス・ヴェガスを大惨事が起きる現場と想定してきた。一部の宗教指導者はソドムの近代都市版として、ラス・ヴェガスが破壊されることを祈り、ジェームズ・ハワード・クンストラーはラス・ヴェガスの未来像を人の住まない、寂れたゴーストタウンとして愉快そうに描いている。ラス・ヴェガスを墓所として描く人々の多くは、最近の観光局のスローガンが実現するよう、つまり、ラス・ヴェガスで起きていることがラス・ヴェガスの内部に留まるよう、望んでいるかに思える。

ラス・ヴェガスは一部の環境保護主義者や文化的ピューリタンにとっては、この世の地獄と映るようだ。一方で、世界中がマカオの後を追って、ラス・ヴェガスのシミュレーションになろうとしているようにも見える。どちらの意見も正しいのかもしれないが、ラス・ヴェガスはツーリストと住民にとっては、ただのありふれた（現実の）場所になっている。盗まれた水資源、選択的な記憶、そして未来に関する「レトロ調」の考えの上に建つありそうもない都市に。

本発表は、道徳的な姿勢に陥ることなく、ラス・ヴェガスの危険な非・持続可能性について批判を展開し、同時に、人間が無駄の中に得る喜びがラス・ヴェガス文化の一部であることを念頭に、ラス・ヴェガス文化の肯定的で審美的な理解を深めることを探る。